

ちよう  
町  
とり  
鳥屋

## 中世を支配した鳥屋氏

室町時代初期の応永一四（一四〇七）年ごろから鳥屋（とりや）の地名が度々、この地を本拠としていた鳥屋氏に関する記録として多くの古文書に登場します。鳥屋氏は、中世を通じて檀原市南部一帯を支配した越智氏の一支族でした。鳥屋氏が当時の地名を採って名にしたのか、逆に地名が鳥屋氏から生れたのか、いまのところ判然としません。

日本書紀の神武天皇二年二月二日条に「神武天皇が大伴氏の祖・道臣（みちのおみ）の功をねぎらい、築坂邑（つきさかのむら）を宅地として与えた」とあります。この築坂邑がいまの鳥屋町の一帯と見られており、そこに宣化天皇陵に治定の身狭桃花鳥坂上（むさのつきさかのへ）陵が古くからあります。

身狭は現在の「見瀬」です。古代の「築坂」がやがて「花鳥坂」と美しく呼び換えられたあと、そこから「鳥屋」が中世前に出てきたと考えられています。旧鳥屋集落の東北に「鳥坂神社」の鎮座しているのが、このことの傍証になるかと思われています。

身狭桃花鳥坂上陵の北約五〇〇メートルに縄文時代後期の鳥屋遺跡が、昭和一九年に発見されています。この地に早くから人の営みのあったことが分かります。